道徳のまち笠松の
ささえ合い通信 No.1 “かさまついいね”写真募集中

微笑ましい家族団らんの様子、性別も年齢も関係なく遊ぶ子どもたちの様子、困っている方を助ける様子など、笠松町の心温まる日常を「パシャ・パシャ」

笠松の“いいね”をとらえた心に響く写真を募集します。

携帯電話で撮ったワンショットや、一眼レフの本格的な写真、偶然とれた写真など大歓迎です。

詳しくは役場、中央公民館、まちの駅などにある第2回“かさまついいね”写真展の募集要項をご覧ください。各賞に賞品があります。また、入賞作品は広報かさまつの表紙に採用されることがあります。

【応募規定】
①A4サイズ以下にプリント
②1人3点まで
③笠松町内で撮影
④昔の写真も可
【応募期限】12月15日（火）
【応 募 先】中央公民館

第1回“かさまつ いいね”写真展　大賞受賞作品

「かさまるくん･かさまるちゃん大人気」

「そ～っとさわってね」

「やさしく教えてね」

かさまつの民話「昔むかし」
まといの松太郎④

「轡組の奴らは何をしてやがる。早く、その柱を鋸や斧でたたきこわせ。ぼやぼやしてんじゃねえ。」

鳶の源太は威勢がいい声だ。松太郎は恐怖から我にかえった。

火は屋根の瓦を吹きあげ、夜空をこがし、西風で遠く、松太郎の家の方に、火の粉が尾を引いて飛んでいった。

何軒もの向うの町の人々までが家財を運びだし、路地を右往左往しているのが見えた。梅の姿は、もう、人ごみに消えていた。

その人ごみの中で梅は屋根を見あげた。風上の屋根にどっかと足をそえ、火照りを受け、赤く染まる松太郎はまるで仁王だった。

「陣屋元の火消しは七十人だ。秋井も、鉄も轡もねえ。源太の方の綱をひけ。柱をこわせ。」

東半分はもう燃えつき、源太の足元や背にも、火のかたまりが、落ちてきていた。

「この綱をひけば、もう、この家は倒れる。」と思った源太は、

「松太郎、もう、降りろ。」と叫んだが、聞こえているはずの松太郎は、「ここをめがけよ、ここを」とばかりにまといを激しく回したが、足元はびくともさせなかった。

秋井も轡も鉄も綱をぐいぐいひいた。最後と思える柱を、鳶でたたいた。松太郎のまといが示すあたりを倒せば、家がくずれ隣の家に火の手が移るはずはない。火消しの人足が一点をねらって、まといをさすあたりをこわした。

つづく